

介護支援ボランティア情報誌

つながるえがお

Vol.4



介護支援ボランティア
セミナー

目次

- 2～4 ——— ボランティアの声
- 5～7 ——— ボランティアとともに～受け入れ施設の声～
- 8～9 ——— 介護支援ボランティアセミナー 2019 開催報告
- 10 ——— いまさらながらの豆知識
- 11 ——— 高木先生コラム
- 12 ——— 市からのお知らせ・介護支援ボランティア登録

「ボランティアをしているのか
ボランティアをされているのか」
みなさん明るくて救われました。

昨年、市が主催したボランティアセミナーを受講した相山さんと新河さんは、近所ということもあって、2人揃ってセミナーを受講後、長坂町の障害者総合支援センター「かざぐるま」でボランティア活動を行っています。

相山さんは、7年ほど前に夫に先立たれ、その後、愛犬も亡くなり、家から出る回数も少なくなって、「家にいると、暗くなっていいことを考えないし、市の広報に載っていたボランティアセミナーに参加しようと思ったんです」ときっかけを話してくれました。

また、新河さんは高校時代にボランティア活動に参加した経験があり、ボランティアに対する関心もあって、相山さんの誘いでセミナーに参加することに。

「かざぐるま」を拠点にしたボランティア活動を開始してからは、近所同士ということもあり、お互いが車を出し合い、乗り合わせながら、毎月1回から2回「かざぐるま」を訪れます。

相山さんは、「ボランティアを始めるようになって、ボランティアをしているのか、ボランティアされているのか、みんな明るくて友達のように。ここの人達が明



相山 久子さん（白州町）（左）

あらかわ
新河 光子さん（白州町）（右）

るくて救われました」と。新河さんも「今まで会うこともなかった人と出会え、ここに来ている人達とは、ご近所感覚で、新しいことを経験できます」と感想を。

主なボランティア活動は、利用者と一緒に昼食を作り、ゲームや室内ゲートボールなどの内容で、午前10時から昼食まで。新河さんはボランティア活動に行くぞと頑張らないで、行ける時に行くようにすれば長続きすると思いますと。相山さんは家にこもっているよりも、行動することが大事。自分もそうだったから、ボランティアに参加した方がいい！と参加を呼びかけます。



定年退職後、「地域で役立つ何かをしよう」
とボランティアを始めました。

かなしろ
金城 カルメンさん（長坂町）

3年前から介護支援ボランティア、障害者ボランティアの活動を始めたと話す金城さんは、自らの介護経験か

ら、「お年寄りの役に立ちたい」と週2回程度、ボランティアとして高根町デイサービスセンターと長坂町の障害者総合支援センター「かざぐるま」を訪れています。

「私のことをみんなが『カルメン』と呼んでくれ、



心から楽しく、感謝の気持ちでボランティアに参加している」と笑みがこぼれます。

定年退職後、2人の孫の面倒をみていたが、小学校と保育園に通うようになって、時間に余裕が出てきたことから「地域で役に立つ何かをしよう」と考えるようになりました。

移動手段は市民バスか徒歩しかなかったこともあって、娘が利用可能な施設として見つけたのがボランティアを始めるきっかけになっています。

沖縄県出身のカルメンさんは、長坂町に転入して約20年。「介護支援ボランティアは沖縄でもあるよ」と親戚から誘われるが、長坂で続けたいと話し、「デイサービスでは、お茶を入れたり、髪の毛をドライヤー

で乾かしたり、簡単なマッサージをしています。みんなに会うのが楽しみで、フラメンコの『カルメンなの?』と声をかける人もいて、楽しいです」と。

はじめからたくさんやろうと思わないで、少しずつ楽しみながらボランティア活動を行うことが長続きの秘訣だそうです。



「ありがとう」や「また来てね」という言葉は魔法のことば。継続の力になります。

齊藤 ^{みなか} 美仲さん（大泉町）



1995年に大泉町に移住した齊藤さんは、進行性の難病を患う夫を抱えながら、傾聴ボランティアの活動を続けています。夫が週2回

デイサービスに通う日を選んで、明野町の障害者支援施設「グリーンヒルホーム」や高根町の特別養護老人ホーム「みのる荘」などに通っています。

ボランティアを始めたのは大泉村の時代。永住を決め、将来的に地域にお世話になる可能性が大きいと、村内のデイサービスセンターでボランティアを行ったのがきっかけでした。

以前、母親が入所している施設でハーモニカを吹き、表情をなくした母親が笑顔を見せてくれたことに感動し、もっとハーモニカが上手になりたいと、2012年にハーモニカの講座を受けました。翌年には仲間とハーモニカグループをつくり、発表の場を兼ねて市内の施設で演奏を行うようになりました。

ボランティア活動をしていると、「ありがとう」や「また来てね」という利用者さんの言葉に癒されます。それが継続の力の一つになっています。また、出掛けることで日常生活にメリハリができ、負担を感じないだ

けでなく楽しみにもなっています。

ボランティア活動にはいろいろな種類があり、自分の体力、趣味、置かれた状況などに合ったものを選べるという点では、誰もが取り組みやすい活動だと思います。私のような条件でもできることがある。そして踏みだしてみると、自分の生活範囲を越えた人達に出会い刺激を受け視野が広がる。心身の活性化に貢献していると感じます。温泉での会話を聞いていると、元気なお年寄りが多いことに驚きます。「運転できないから一日TVを見てるだけ」と“足”を心配している人も多いようです。彼女・彼等が参加できるしくみがあればいいですね。

人は誰でも高齢や病気、事故などで弱者になる可能性があります。高齢者同士、難病を抱えている人同士がつながり情報交換できる、そんな場をつくるのに自分に何ができるか考えているところです。

齊藤さんの趣味のひとつに陶芸があります。難病の人の集まりや施設訪問を通して、手の不自由な人が使いやすいカップを造ってみようとストローが固定できる湯呑みを試作。利用する人の意見を聞いて改良を重ね「趣味にもいい影響を与えています」と笑みを浮かべます。



できる時にできる事を。
寄り添って共感し、
一緒に支えあって
積極的に活動しています。

徳谷 ^{のりかず} 律一さん（高根町）
^{まちこ} 待子さん（高根町）



2015年に静岡県から北杜市高根町に転入した徳谷さん夫妻は、3年前からそれぞれがボランティア活動に参加しています。

妻の待子さんは、夫の父親の介護の経験や前からボランティア活動を行っていたこともあって、傾聴ボランティアをはじめ、障害者ボランティア、介護支援ボランティア、ファミリーサポートなど活動の幅も広く、「利用者に寄り添って共感できるし、一緒に支え合って生きているという社会が大切だと思います。家にいるよりも、できる時にできることをやりたい」と積極的に行動しています。

夫の律一さんは、建築士の資格があり、北杜市でも建築関係で何か手伝えないかと思ってましたが、関連する事業がないので、介護支援ボランティアを紹介され、高根町デイサービスセンターを拠点に活動を始めました。「お茶を運んだり、髪の毛を乾かししたりと簡単な手伝いが中心です。利用者が『ありがとう』と言ってくれるのがうれしくて、笑顔から元気をいただいています」と笑みがこぼれます。

ボランティア活動のために、夫婦そろって「健康に注意しています。元気でないとできないから」と話し、

待子さんは、毎朝子供たちの登校時に合わせた散歩を続けているとか。「孫を見ているようで、愛おしくなります」と楽しそう。

律一さんは「無理をしないでマイペースがいい。義務と考えずにできることをさせてもらっていると思うことで長続きする」と長続きの秘訣を話すも「男性が少ない」とぼつり。社会の最前線で働いたことで、プライドが邪魔をしているのではないかと言います。

お茶を運んだり髪の毛を乾かししたりするのは、女性の仕事というイメージが強く、「囲碁や将棋の時間をつくってもいいと思う。介護支援ボランティアでは、男性が男性と話をするのは大事だと感じることも多いので、傾聴ボランティアを勧めたい」と待子さん。律一さんは「自分から利用者に積極的に声をかけると、良く話すようになります。一度そういうのは（プライドは）捨てて、一歩踏み出してもらいたい」と男性ボランティアの参加を呼びかけます。

2人は、ボランティア活動を通して貯まったポイントは、利用者が使うクッションカバーや団体への寄付などで社会還元しています。ポイントを貯めることは励みになり、精神面ですごくいい制度です。



今回は6人の介護支援ボランティアの声を伺うことができました。それぞれに活動を始めた動機を持ち、様々な施設で多様な活動を行っています。6人に共通するのは、ボランティア活動を通しての豊かな関係性です。そこには“楽しみ”、“感謝”、“癒し”、“～したいという思い”が詰まっています。この関係性には、決してボランティアからの一方通行ではなく、相互に共感しあいながら、相手のことを理解している姿勢が読み取れます。自分からスタートして、他者へ、そして社会へと視野を広げていくボランティア活動の姿は素敵ですね。

受け入れ施設の

声

音楽活動の発表の機会や練習の場として、
このホールを活用してもらいたい。
施設利用者も音楽が好きなので、
練習風景を見るだけでも楽しいのでは。



障害者支援施設 第二仁生園 社会福祉法人 愛寿会

北杜市長坂町小荒間 27-4 TEL0551-32-8270 FAX0551-32-8271

「傾聴ボランティアが、月2回程度来てくれています。顔なじみになっていて、利用者も楽しみにしているようです」と話すのは、第二仁生園の小林初男園長。

第二仁生園は、長坂町の社会福祉法人愛寿会が障害者へのサービス提供を強化するために設立された施設で、2007年に開所。現在の入所利用者数は30人。平均年齢は60歳。一人ひとりを尊重し、地域に根差し、支えられ、利用者やその家族からも感謝される施設をめざしています。

傾聴ボランティアとして訪れているのは「なの花の会」のメンバーで、毎回2人～3人が、月2回程度施設を訪れ、話し好きな利用者と会話を楽しんでいます。

また、吹奏楽団・合唱団やハワイアン、マンドリンなどの慰問もあり、小林園長は「市内で様々な活動をする方が慰問に来ます」と話し、夏祭りでイベントを盛り上げることも。

毎年夏には、甲府駅前の百貨店を会

場に、山梨県障害者文化展が行われています。第二仁生園の利用者も作品を出品していますが、職員の負担が大きくなってしまいうこともあって、ボランティアの協力があると助かります。利用者の自由活動の時間が多い水曜日に折り紙や切り絵、書道、絵画などの創作作品づくりに協力してくれる人が希望です。平日でも時間調整ができれば、ボランティアに参加していただきたいです。

毎月、管理栄養士が企画したおやつ作り教室を開き、主に洋菓子作りを行っています。こちらもボランティアとして利用者と一緒にお菓子作りに参加してほしいです。

一方、施設内には、約130平方メートルの多目的ホールが併設されていて、「音楽活動の発表や練習の場として、このホールを活用してもらいたい。施設利用者も音楽が好きなので、練習風景を見るだけでも楽しいのでは」と施設を開放しています。利用者との交流を図って、練習の場、発表の場として希望者の連絡を待っています。



高木's Eye

福祉施設は誰のためのものでしょうか。第二仁生園は障害者のためだけでなく、地域住民の皆さんのためにも在る施設ですね。ボランティア活動という入口から利用者との交流を図り、地域住民も集える場、この施設を利用する全ての方が輝ける場としての施設の姿があります。このような施設を作っていくには、施設職員、利用者、ボランティアの理解と行動が必要です。少しずつ動き始めた地域の輝ける場としての施設。長坂町の中でのこれからの第二仁生園の在り方に期待です！

受け入れ施設の 声

月1回のペースで開かれています。
専門職が参加者を見守ります。

オレンジカフェ フルリールむかわ

介護老人保健施設 フルリールむかわ
北杜市武川町柳沢 740-1 TEL.0551-26-0111



作業療法士、管理栄養士などの専門職を豊富に抱えている武川町のフルリールむかわが開設するオレンジカフェむかわは、毎月テーマを変えて月一回のペースで開かれています。

取材した日は、認知症サポーター養成講座を開き、約 10 人の利用者と受講者、ボランティアが参加。日常的な認知症の問題を分かりやすく紹介しようと、作業療法士の和田久美さんは、認知症の対応で、日頃経験しそうな場面を紹介するDVDを上映しました。

買い物で、店内の菓子袋を勝手に開けてしまい食べ始めてしまった場合と認知症の母親が買い物途中ではぐれ、サービスカウンターに駆け込んできた場合の対応で、良い例、悪い例をそれぞれ紹介しました。

続く講座では、「認知症サポーター」の役割や「認知症って何だろう」、「認知症になるとどんな言動や行動があるのか」などを説明し、「認知症の症状に最初に気づくのは本人です。誰よりも一番心配なのも苦しいのも悲しいのも本人です」と話し、「驚かせない、急がせない、自尊心を傷つけない」という3つの基本姿勢とポイントについて説明がありました。

講座後のティータイムでは、管理栄養士がつくった「りんごのコンポート」が振る舞われ、デザートをきっかけに料理の話や認知症になった家族についての身の上話など、情報を共有しました。

この講座では、「認知症の人を応援します」という意思を示すオレンジリングが配られ、地域の理解者としての輪を広める目的があります。

昨年 11 月、認知症サポーターのチラシをコンビニエンスストアで見たのをきっかけに参加した小淵沢町在住の桜井伸さんは、86 歳の母親の物忘れが酷くなってきたことから養成講座を受講しました。

講座の中で記憶障害による「財布を置いた場所を忘れる」、「亡くなっている人のことを話し出す」という内容がピッタリとあてはまっていたことから、講座後のティータイムを利用して、介護支援専門員に相談。

「今までは母親と口論になっていたが、今日の話を聞いて、『財布がない』に焦点をあてるのではなく、視点を変えて『一緒に探そう』、『いくら必要なのか』と話をして、不安にさせずに、優しい対応をすることを学びました」と話します。

桜井さんは、「相談して良かった。これから帰ってすぐに実践します」といい、「対応が役に立ったら、オレンジサポーターとしてリングを身に付けたい」と笑顔で話しました。



ボランティア活動というと“行動”することが思い浮かぶかもしれませんが、しかし、“行動”の前に“学び”があることがボランティア活動です。認知症サポーター養成講座は、この“学び”を与えてくれる機会です、フルリールむかわでは、専門職が様々な北杜市での日常生活の場面を想定して認知症という病気だけでなく、本人の気持ちを伝えてくれています。

私たちにはわかりにくいことを、丁寧に伝えてくれる専門職がいる施設。武川町の中でのこれからのフルリールむかわの在り方に期待です！

ボランティアの参加によって 地域との結びつきが更になります。

つどいの広場

はっぴいたんたん（高根町）0551-42-1401（ほくとっこ元気課）

ひよこルーム（長坂町）0551-32-8288

ひまわりルーム（小湍沢町）0551-36-8280（小湍沢共同福祉施設内）

たんぽぽルーム（武川町）0551-26-5550（甲斐駒センターせせらぎ内）



市内にはおおむね3歳までの乳幼児とその保護者を対象にした子育て支援施設「つどいの広場」（4カ所）と「子育て支援センター」（3カ所）があります。親子で楽しく遊んだり、親同士の交流と友達づくりの場になっています。

今回は、つどいの広場はっぴいたんたんの小澤満子先生に話を伺いました。

各施設とも親子の自由なあそびを中心に地域や施設の特徴をいかしたイベントを行っており、その中で絵本の読み聞かせ、季節の行事等を通じて地域との交流もありますが、介護支援ボランティアの受け入れは、これまでなかったと言います。

今回改めて、受け入れ施設として、ボランティアを想定して話を伺ったところ、レクリエーションやイベント中の子どもの見守りや施設周辺の草刈りなどの環境整備の協力で、「サポートして頂ける方がいれば、ぜひお願いしたい」と話しました。

また、利用者の中には、他県からの移住者や転勤者の家族も多くおり、子どもの祖父母にあたる年代が近くにいない人も多くいます。

介護支援ボランティアに話し相手になって頂く中で、住んでいる地域のことや人付き合いなど地域を知る機会にもつながり、地域との結びつきがさらに強くなることも期待されています。

小澤先生は「各施設で求められているボランティア活動は、それぞれ異なるので、『こんなことでお手伝いしたい』、『子ども達にこんな楽しみ方を紹介したい』、『施設周辺の草刈りに協力したい』といった具体的な要望をご連絡頂ければ、各施設のマッチングを含めて調整したい」と話しています。

介護支援ボランティアが子育て支援施設で活躍することで、安心して子育てできる基盤がさらに強固なものになりそうです。



高木's Eye

つどいの広場は、これからボランティアとの関係を作り上げていく施設です。ボランティアとの関係、地域との関係はどのようになっていくでしょうか。この関係は、施設側からだけでなく、ボランティアや地域の側からも歩み寄ることが重要です。先の2施設に見られるように、両者の歩み寄りで施設の在り方は変化します。つどいの広場が親子を対象とした地域に閉じた施設になるのか、親子を対象としつつ、地域住民もボランティアとして、つどいことができる地域に開かれたつどいの広場となるのか。北杜市の中でのこれからのつどいの広場の在り方に期待です！

介護支援 ボランティアセミナー 2019

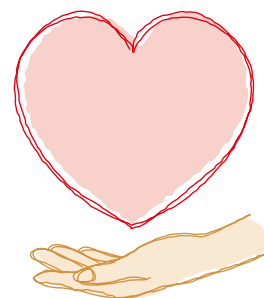


コーディネーター：高木寛之先生（山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科）

介護支援ボランティアに興味のある人や、既に登録している人、ボランティアを受け入れている施設、市職員が交流する「介護支援ボランティアセミナー 2019」が、2月15日、北杜市役所で開かれました。

受け入れ施設で働く人と介護支援ボランティアの登録者など、顔の見える交流を通しながら、お互いを理解し、提案し、より良い関係性の構築を図ろうと開かれているもので、今回で3回目です。

ボランティアがいきいきと チカラを発揮するために



当日は、介護支援ボランティア登録者や施設職員、市役所職員、学生など約80人が出席。A～Jグループに分かれて、グループディスカッションを中心にボランティア活動について意見を交わしました。

冒頭では、介護支援課から北杜市の高齢化についての現状説明が行われ、2018年の高齢化率は37.2%で、2025年に40.0%を見込んでいることや働き手、担い手不足の解消のためにも高齢者が元気で活躍する地域づくりの重要性が語られました。

続いて、今回のセミナーのねらいは「より良い関係を築く、そして有意義な活動へつなげる」ために、施設と利用者、ボランティアによる地域共生社会の実現を目指す場として設けられていることが紹介されました。

実践報告では、介護支援ボランティアが活動して

いる「障害者総合支援センター」（障害者施設）と「いずみふれあい児童館」の2施設が登壇しました。

また、2018年10月19日に高根町農村環境改善センターで開かれた高齢者通いの場運営団体交流会の「秋のケラケラと笑い転げる笑談会」で、ボランティアが一堂に集まって情報交換した状況や情報共有した内容の説明も行われました。

ボランティアの協力を求めている施設は、市内に79施設（市に登録）あり、その中でも高齢者介護施設が最も多いが、放課後児童クラブやつどいの広場、高齢者通いの場、認知症カフェなどでもボランティアを募集していることを紹介しました。

現在の介護支援ボランティア登録者は164人で、この内、女性は137人、男性は27人であることを紹介しました。

障害者総合支援センター（通称：かざぐるま）

輿石 恵美子さん

障害者施設では、職員全員で利用者の見守りができないことや耳が不自由な利用者に対応するため、「筆談ボランティア」が必要になっているとし、「利用者に情報を伝える」、「外出での支援」の協力が求められました。また、ボランティアの協力は、職員の刺激になっていると話しました。



いずみふれあい児童館（大泉町）

青嶋 今日子さん

わらべ歌を紹介したいというボランティアが参加した際、子供達全員を対象にせず、興味のある子ども達を集めてボランティアをお願いした例を紹介し、「わらべ歌を歌う子ども達を見て、職員だけでは、提供できない内容だった」と内容によってボランティアの力が大きいことを話しました。

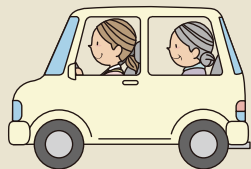


高木先生は、この2つの報告から「職員が（ボランティアを）また受け入れたいと思うようになっていきます。ボランティアが入ることによって、職員にはできない個人の楽しみの追求ができるし、ボランティアの協力によって、施設の在り方を考えるきっかけにみなさんがなっている」と話し、施設と「どんなことができる」という内容を相談し、調整することが大事になってきていると話しました。

介護支援課指導監

廣瀬 佐智子さん

在宅を支えるボランティア活動について、傾聴ボランティアの自宅訪問や、地域住民によるゴミ出し、病院までの送迎など、自発的に行って、地域で支え合っていることを紹介し、ボランティアが多くの場面で活躍している例を伝えました。



グループディスカッションでは、10グループに分かれ、ボランティア活動を行っての感想や自身の変化、利用者や職員、組織の変化、施設以外で行っている活動の3点についてグループごとに話し合いました。

グループ発表では、「自然に手伝う」や「続けることが一番大事」、「障害者への理解が深められた」、「職員の刺激になっている」、「孫がボランティアに興味を持っている」など、多岐にわたった内容が発表されました。

介護支援課

奥山 史帆さん

情報提供として、重度の認知症の妻と、それを支える夫の例を語り、認知症が進んだ妻の行動がエスカレートし、長年の妻の介護に夫が限界を感じていることを知った地域住民と商店が、夫の負担を少しでも減らそうと立ち上がり、見守りや食材配達などで協力した例を話し、「（夫の様子から）一時はどうなることかと思っていたが、（周りの人の協力で）ひとりきりじゃないと感じ、夫の表情が明るくなった」と紹介しました。

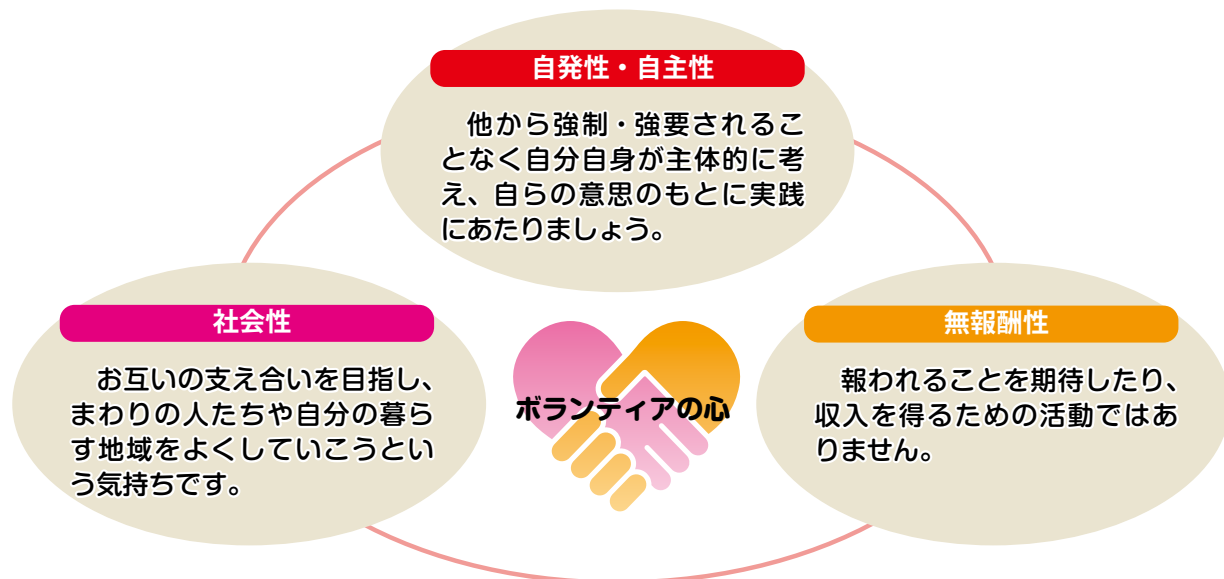
地域の人達が夫婦を支えたことで、地域住民と商店の対応も変わり、支え合いが地域を変えていることにつながったと紹介しました。



【いまさらながらの豆知識】

※そもそもボランティア活動って…

かつては、“奉仕”や“慈善”のようにお金や時間に余裕がある人が行なう活動と捉えられていました。地域の中で、誰もが元気に楽しく、幸せに暮らしていくために自分たちができることを自らすすんでする活動です。“いつでも どこでも だれでも 楽しく”が合言葉!!



ボランティアを始めるのに、特別な技術や資格は必要ありません。

もちろん年齢制限もありません。

活動する中で、様々なことを「知る」「理解する」「気づく」ことができます。そして、活動を通した「出会い」「学び」もたくさんあります。



※施設・事業所がボランティアを受け入れる意義

施設、事業所みなさん、どのような目的でボランティアを受け入れていますか。『入所者にとって刺激になる』『施設に地域の風を吹き込んでくれる』『職員も緊張感もてる』など目的はさまざまかと思います。ボランティアを受け入れることは、施設だけではなく、実はボランティア自身または、地域社会にとっても大きな意味を持っています。

※施設・利用者にとって…

- ①提供するサービスを拡大することができる。
 - ★職員と異なる視点
 - ★職員と異なる役割
 - ★質の向上
- ②施設への理解を広げることができる。
 - ★地域との架け橋
- ③施設利用者との社会とのかかわりが広がる。
 - ★ボランティアの存在自体が大きな意味

※ボランティアにとっては…

★社会参加、学び、成長の場

※地域にとっては…

★地域福祉推進を図る上で大きく期待



コラム
04

ボランティアが変わる、 ボランティアが変える

今回は、ボランティアと“変化”について考えてみたいと思います。北杜市内でボランティア活動をしている方々とお話をする中で感じるものの一つに、“変化”というキーワードがあります。この“変化”は、ご自身の変化と周りの変化の二つからお話を伺うことができます。

ご自身の変化には、介護予防、閉じこもり予防という健康面の変化から、図書館に勉強に行くようになったというような行動面の変化、あの人大丈夫かしらと考えるようになったという思考面の変化、生き生きして楽しいといった精神面の変化があります。一方、周りの変化には、関わりを持つ利用者さんなどの日頃の表情や暮らし方、施設職員の働き方といった施設サービスの変化、活動内容や福祉に対する家族の理解といった家庭内の変化が挙げられます。

この中で、今回注目したい変化は周りへの変化です。伝統的なボランティア活動には、活動者は困った人を助けるといった、奉仕活動に近いものが多くありました。これらの活動は、相手を“〇〇できない人”という前提で捉え、時に本人の力や気力を失わせてしまうこともあり

ました。しかし、近年は、ただ一方的に助けるだけでなく、活動者自身も一緒に楽しみたいという気持ちを強く持つ方々が増えてきました。このことは、相手を“〇〇できない人”ではなく、一緒に“〇〇できる人”という前提で捉えるという価値観の変化を促しました。ボランティアの捉え方の変化は、困りごとを抱える人達にとって、大きな変化をもたらしました。それは、できないことが多くなりつつある生活の中に、“ともに楽しむことができる自分と時間”を見つけることです。このような自分と時間の発見が、利用者の表情や暮らし方に変化を与えているのです。

このようなボランティアのちょっとした考え方の変化が、困りごとを抱えながら生活する人々の日常に彩りを与えることにつながっていきます。皆さんは、相手の何を知り、理解し、どのような考えで見えていますか？接していますか？声をかけていますか？皆さんの考え方、かわり方で、世界は変わっていきます。ボランティア活動を通して、北杜市に生まれてきた小さな変化を探していきましょう。



山梨県立大学講師 高木 寛之



Profile

埼玉県出身。市民活動、ボランティア、地域福祉、福祉教育が専門。

2015年から山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科講師を務め、現在に至る。

介護支援ボランティアに登録を!!

対象者

介護支援ボランティア登録者
介護支援ボランティア受入施設の職員
ボランティア活動に興味のある方

●事前登録が必要です。印鑑を持参して登録窓口へ。

ポイント

交換上限 (年度内)

10000ポイント(100P=100円)。介護支援ボランティアを行うと1時間に1スタンプ、1日に2スタンプまで。(1スタンプ=100P)

ポイント

交換時期

年度末まで活動して貯まったポイントは、翌年度4月中に北杜市社会福祉協議会窓口で、ポイント転換申請をすることができます。

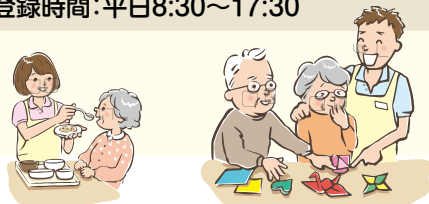
受入施設でのボランティア活動

- ・レクリエーションなどの指導、参加支援
- ・お茶出しや食堂内の配膳、下膳などの補助
- ・散歩、外出および館内移動の補助
- ・模擬店、会場設営、利用者の移動補助、芸能披露などの行事の手伝い
- ・話し相手
- ・施設職員と共に行う軽微かつ補助的な活動
(詳細は、各施設によって異なります。)

現在、北杜市では、164人の介護支援ボランティアが活動しています。

登録窓口:北杜市社会福祉協議会(市社協)本所
〒408-0011 北杜市高根町箕輪新町50
TEL 0551-47-5202

登録時間:平日8:30~17:30



詳しくは

北杜市介護支援ボランティア事業

検索



編集後記

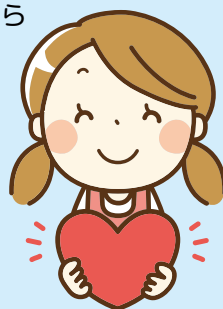
たくさんの方々のご協力をいただき『つながるえがお』第4号を無事に発行することができましたことに感謝申し上げます。今回は、実際にボランティアをされている方の生の声、受入施設の方のボランティアに対する思いが詰まった内容になっています。みなさんがボランティア活動を楽しみ、生きがいを感じながら実践した様子が伝わったでしょうか。ボランティアをするからこそ得られる役得・それはこれからの人生に彩りを添えてくれます。

ボランティアに興味を持たれた方、まず、一步を踏み出してみませんか。

4月はスタートの季節です。

これからも皆さんの期待にこたえられる内容にしていきたいと思います。今後ともよろしくお願いたします。

情報誌・ボランティア活動等に関するご意見・ご感想をお待ちしています。



《発行》北杜市役所 市民部 介護支援課 〒408-0188 北杜市須玉町大豆生田 961-1
TEL 0551-42-1336 FAX 0551-42-1125